

短いノイズの後に映し出された映像には、しばらく前から行方不明とされていた「ベロボグ重工」のグレース・ハワードの姿があった。

鉄柱に拘束された彼女は、すでに意識を失っているようで、目を閉じたまま力の抜けた表情を浮かべ、口元からは涎が垂れていた。

ア……

ク……

いつも身につけている工具や装備はすでに取り払われたのか、映像の中には一切その姿がなかった。

邪魔になるものはすべて排除されたのだろう。



REC

手が伸び、彼女のまぶたをそっと持ち上げる。

抵抗の意思などとうに消え失せたグレースの瞼は、指の動きに逆らうことなく持ち上がり、その下から虚ろな瞳が現れる。

くー…

くー…

その濡いオレンジの眼差しは、焦点を失ったまま天井のどこかを彷徨っていた。



男の手は彼女の身体を辿るように動き、やがてタンクトップの胸元を乱暴に引き下ろした。

それにより、ギリギリまで押さえつけられていたグレースの豊かな胸が、一気に外気に晒される。

ズリィん♡

布越しに感じ取れた重みを遥かに超える現実の質量は、想像すら許さなかった。

完全には脱げていないタンクトップが下から押し上げるように胸を支え、それが余計に圧倒的な存在感を際立たせていた。

REC

男は手にした小さな装置を彼女の目元へと当てた。

しばらくして画面に映ったそれが何かを認識した瞬間、背筋に冷たいものが走る。

それは、眼科で使用される「開眼器」。

本来ならば医療行為のための器具が、いまや彼女の眼球運動を観察するためだけに用いられている。



さらに、男はグレースの回にも別の器具を装着した。
それは回腔を強制的に開いたままにする「開口器」だった。

すでに緩みきっていた彼女の表情は、この器具により完全に崩壊し、滑稽なまでの無防備な顔へと変貌した。

カー……

カー……

回元からは涙が滴り、顎を伝って肌を濡らしていく。
目はそれぞれ違う方向に、ゆっくりと彷徨っていた。
日頃は誰もが憧れる才色兼備の女性が、いまやこの異様な姿へと堕ちている。

● REC

やがて、開いた唇の隙間から彼女の舌が重力に任せて垂れ出す。

筋肉の緊張が完全に抜けた状態で、ただだらりと垂れ下がるその様子は、何もかもを諦めた人形のようなだった。

かー…

おん

かー…

この映像の中のグレースは、まさしく『美しき者が決して見せてはならない顔』を体現していた。

REC

突然、映像が揺れたかと思うと、次の瞬間には横たわるグレースの姿が映し出された。
彼女は依然として力の抜けた表情のまま、
心地よさげに涎を垂らしながら眠り続けている。

ガー……

ガー……

タンクトップはいつの間にか中央が切り裂かれ、左右へ無造作に開いた布地の隙間から、
その中身が惜しげもなく露わになっていた。

男の指が再び彼女のまぶたへ伸びた。まるで意識の有無を確かめる儀式のように、何のためらいもなく軽く持ち上げられる。

案の定、グレースの瞼は抵抗ひとつ見せず、ふわりと開いた。その奥の瞳は大きく上方を向いたまま、虚空のどこかを彷徨っていた。

その目を見ただけで、まだ彼女が戻ってきていないことをこちら側にも鮮烈に伝えてくる。むしろ、この状態がしばらく続くのだろうという確信さえ抱かせた。





REC

やがて、男の手はグレースの豊満な胸へと沈み込み、
ゆっくりと揉み上げ始めた。

片手では到底包み込めない圧倒的な量感に、思わずこちらまで質感を想像してしまう。

下!

十

男もその感触を味わうように、指を埋め、柔らかな双丘を揺らしながら丹念に揉みしだいていた。



REC

男は再び開眼器を彼女の両目に装着し、無秩序に動く眼球の軌跡に興味深そうに眺めていた。

同時に、揉みしだいていた胸の上へ自身のものを押し当てる。

ガー……

ガー……

完全に意識を手放したのだろう。
グレースの瞳は真っ赤に充血したまま、意志とは無関係に左右へ転がっている。
もはや外界を認識することではなく、ただ身体だけが刺激に反応しているようだった。

REC

胸を揉み寄せると、男はそのまま乳房で自身を包み込み、
胸による奉仕を始めた。

そもそものサイズが規格外なのか、無理に押し付けなくとも
十分に深く包み込んでしまう。

画面越しであるにもかかわらず、柔肉の弾力と押し寄せる圧が伝わってきそうなほど、
その揺れは美しく、官能的だった。

カー

カー

パ
リ
ッ
♡

パ
リ
ッ
♡

REC

ほどなくして、彼女の喉もとへ白い液体が静かに流れ落ち、男の行為が終わったことを示した。

男は徹底してグレースを自身の欲望を満たすための「器」として扱うつもりなのだ、画面からも容易に理解できた。

カー

ドグニッ

ドグニッ

カー

単に呼吸し、温度を持つだけの肉体——それ以上でも以下でもない存在として扱うために、ここまで丹念に舞台を整えたのだろう。

そもそもこの映像が私の手元へ届いた時点で、捕まる可能性など微塵も考えていないのだ。

REC

男は間を置くことなく、再び彼女の口へ自身を押し込んだ。

グレースの小さな口はその大きさに圧され、完全な密閉状態となり、どこかタコの嘴のようにも見えた。

ズッ

ん……

ズッ

そのまま前後に動かすにつれ、彼女の舌が押し出されるように突き出し、常識ではあり得ないほど奇妙で歪んだ表情が生み出されていく。
意識がある状態なら、決して見せることのない顔だった。

REC

長い間、彼の動きが続いたのち、ふとその手が止まった。

そして、彼女の唇に触れていた熱がふっと離れた瞬間、まるで体温の余韻のように、白い滴が静かに回元から零れ落ちた。

かーい

トロォー♡

んがー

それは、彼の昂ぶりがついに頂点へ達したことを暗示する印象的な光景であり、映像越しに見ている自分さえ、その「満たされた呼吸」が肌で感じられるほどだった。

画面が切り替わり、次に映ったのはグレースの下半身だった。

衣服はすべて外され、ただ彼女のゴーグルだけが不思議なほど無傷のまま残っている。

それが彼の嗜好によるものなのか、あるいは彼女の衣装があまりにも密着していて、まるで剥がすこと自体が儀式のように困難だったのか——そんなことを想像させる、不思議な余白がそこにはあった。

彼女の秘められた場所へ意識を向けると、
その奥から静かに滴り落ちる艶やかな雫があった。

胸元や唇で紡がれた余韻が、
まるで身体の深部にまで染み込み、
彼女自身が抱く無意識の反応として現れているかのようにだった。

くぱあ♡

トロキ...♡

初めてではないのだろう、という確信めいた感覚が胸をよぎる。
むしろ彼女の場合、相手が人である必要すらなかったのかもしれない。
精密機械を操る彼女らしい、孤独な探求の延長線上にある感性——
そんな想像さえ掻き立てられていた。

ここまで導かれた流れの先に、
彼の欲望が、次に触れようとしている領域が静かに姿を現した。

潤んだ彼女の中心は、
まるで呼吸する生き物のようにわずかに収縮し、
外界からの訪れを待つように脈打っていた。

かー

かー

ぐちゅっ

しかし、その反応とは真腹に、
彼女の表情はまだ遠い夢の淵に沈んだままで、
片側のまぶたに取り付けられた器具が彼女の瞳を静かに露出させていた。

開かれた唇から覗いた舌が、ゆっくりと重力に引かれるように姿を現した。
それが感覚の余波なのか、深い陶酔の産物なのかは分からない。

んかー

かー

だが、上昇した両眼の白さと、
刺激に合わせて身体の内から溢れ出す透明な雫だけは、
彼女がいまどこへ旅しているのか、を雄弁に物語っていた。

そこから、彼が刻みつけた痕跡が、まだ温もりを帯びたままゆっくりと流れ出ており、カメラはその光景へと焦点を寄せていった。

開いて閉じ、また開く。
その柔らかな動きは、
彼の掌の記憶がまだ彼女の身体に残っているかのようだった。

トロキ〜♡

滴り落ちた白い液体は、やがて彼女の臀部の陰影に溜まり、
淡い光を映す小さな白い湖を作り始めた。

シートへ沈むその色合いを見つめながら、
彼はなおも彼女の中心をそっと押し広げ、
まるで、この瞬間を形に残そう。とするかのように動きを繰り返していた。

対照的に、グレースは最後まで夢の底に沈んだままで、
その姿はまるで遠い星の光の中に消えていく像のようだった。

トドロク……♡

彼の手がふっと離れ、
整理の気配が訪れたかと思った瞬間――
グレースの肛門が、静かに、ゆっくりと開き始めた。

近くに彼の気配はなく、
録画だけが淡々と続いていることが
映像の微かな音の響きから伝わってくる。

開いていく円が、まるで呼吸するかのように奥を露わにし、
その不可思議な動きの理由を探ろうとした一瞬、
映像はそこで途切れた。

くはっ♡